

国立国語研究所学術情報リポジトリ

# 日本語学習者の作文における並列・継起の接続表現の習得：中国語母語話者の縦断コーパスの分析を通じて

著者	董 芸
雑誌名	国立国語研究所論集
号	19
ページ	127-138
発行年	2020-07
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002832">http://doi.org/10.15084/00002832</a>

## 日本語学習者の作文における並列・継起の接続表現の習得

——中国語母語話者の縦断コーパスの分析を通じて——

董 芸

一橋大学大学院 博士後期課程／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

本稿は、中国語母語話者の縦断作文コーパスを用いて、並列・継起の接続表現の使用実態を分析し、学習歴に即した習得過程の解明を目指すものである。1年次後半、2年次前半、2年次後半の作文を分析した結果、次のことがわかった。

- ① 1年次後半では、テ形の使用も見られるが、「そして」に過剰に依存している。
- ② 2年次前半では、テ形が定着するため、接続詞の使用率の低下と、接続助詞の使用率の上昇が見られ、同時に並列と継起の形態上の区別が可能になる。
- ③ 2年次後半では、接続表現のバリエーションは増加しないが、動詞連用形中止法の使用が見られ、作文が書き言葉らしい文体となる。また、段落の冒頭で接続詞を使えるようになり、使用位置に配慮しながら接続表現を選択できるようになる\*。

**キーワード：**学習者コーパス、第二言語習得、作文教育、接続詞、接続助詞

### 1. はじめに

石黒（2000）では、接続詞の「そして」は用法が幅広く、機能がわかりにくいと指摘されている。また、市川（1978）と石黒ほか（2009）で述べられているように、「そして」のような添加型の接続詞がなくても文意が通ることが多い。「そして」は初級で学習されるため、安易に多用されがちだが、実際には使い方が多様で、使わなくてよいときもあるため、学習者にとって習得が困難な接続詞のひとつである。

石黒ほか（2009）では、接続詞のつかない文が無標であり、つく文が有標だと主張している。文章の作成にあたり、接続詞を使うことで全体のわかりやすさを増すことはできるが、使わないのが一般的で、たくさん使った方がよいわけではない。したがって、学習者が作文で接続詞を過不足なく使用できるように、接続詞のかわりに使える表現を身につける必要があると考えられる。接続詞のかわりに使える表現は、同じ種類の接続助詞も含まれるため、接続詞を接続助詞と合わせた、接続表現という枠組みで分析する必要がある。

市川（1978）によると、「そして」の用法は並列と継起の2種に分けられ、2つの出来事を、同時点で成立するものと捉えるか、時間の流れに沿って生起するものと捉えるかによって、用法

\* 本研究は国立国語研究所機関拠点型機関研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（プロジェクトリーダー：石黒圭）の研究成果の一部である。また、本研究はJSPS 科研費 JP18K00731「中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供」（研究代表者：布施悠子）の助成を受けている。

が異なってくるという。学習歴が長くなるにつれて、学ぶ並列・継起の接続詞や接続助詞の種類は増加する。そこで「そして」について、どの学習段階からどの用法が使えるようになるのか、使わない場合には他のどの接続表現で並列と継起を表すのかを明らかにすることが求められよう。

このように、本研究では学習者における「そして」を含む並列・継起の接続表現の使用実態を分析し、学習歴による変容とその要因を考察していきたい。

## 2. 先行研究

### 2.1 接続表現の定義

接続表現は、接続詞、接続助詞および相当の機能を果たすものを指し、市川（1978）の接続語句と一致するものである。日本語記述文法研究会編（2008）では、「同時点で成立する2つの事態を並べる」ことを「並列」、「時間の流れに沿って順に生起する複数の事態をつなぐ」ことを「継起」としている。

接続詞の分類について、市川（1978）では、文の連接関係が「順接型」、「逆接型」、「同列型」、「添加型」、「対比型」、「補足型」、「転換型」の7種に分類されている。本稿は、「添加型」の接続詞を扱うことにし、さらに並列、継起に分ける。接続助詞の分類は、日本語記述文法研究会編（2008）に従う。なお、仁田（1995）では、継起が「時間的継起」と「起因的継起」の2種に分けられているが、本稿では「時間的継起」のみを対象とする。実際に学習者が使用した並列・継起の接続表現は表1の通りである。

表1 並列・継起の接続表現の分類

接続表現	並列	継起
接続詞	そして、それから、また、さらに、それに	そして、それから、その後
接続助詞	で、たり、し、連用形	で、てから、たあと、と、たら、連用形

接続表現の認定基準は、以下の3つである。

- ①接続詞は文頭にあるもので、文以上の単位を結びつけるものだけを扱う。
- ②並列・継起以外の、「私は泣いてお母さんにお願いをした」のような付帯状況を表す「～て」は分析対象外とする。
- ③前後の継起関係ではなく、「早く教えていただけると／たらありがたいです」のような仮定を表す「～と」、「～たら」は分析対象外とする。

### 2.2 接続表現の習得過程

これまでの接続表現の習得過程についての研究は、横断データを用いて行われることが多く、浅井（2003）、峯（2007）がある。浅井（2003）では上級日本語学習者の作文を対象に、接続詞の使用数と種類の調査が行われ、順接の接続詞が多いこと、早い段階で学習する接続詞の使用頻度が高いことが指摘されている。峯（2007）では、横断データを用いて各レベルによる学習者の接続辞、いわゆる接続助詞の習得状況の分析が行われ、学習者の接続助詞は、事実的から仮定的

へ、順接から逆接へ、と使用が広がることが明らかにされている。縦断的な研究として、砂川(2015)では縦断作文コーパスを用いて逆接型の接続詞の使用実態を分析した結果、「でも」が最も早く習得されるという。

### 2.3 本稿の位置づけ

これまでの接続表現の習得過程を扱った研究は、接続表現の接続類型による習得状況の違いを中心に行われてきた。同じ接続類型の接続表現の習得に焦点を当てて分析した研究は砂川(2015)以外見当たらない。また、接続詞と接続助詞の両者の関連性に着目しながら、学習者の習得過程を分析したものは管見の限りない。そこで、本稿は縦断作文データを用いて、並列・継起の接続表現の使用実態を分析し、学習歴による変化とその要因を考察し、並列・継起の接続表現の習得過程を解明することを目指す。

## 3. 研究方法

### 3.1 分析の対象

分析に用いたのは、中国語を母語とする学習者の作文コーパス『北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)』である。このコーパスは、中国の北京師範大学の日本語学科の大学生17名を対象に継続的に収集されているもので、入学時点で日本語学習歴のない者は16名である。作文調査は一定の期間ごとに類似するテーマで行われ、大学入学時から4年次修了まで年間3回(1年次のみ入学直後の期間を除く年間2回)、計11回実施されている。

本稿では、日本語を学習せずに入学した学習者における1年次後半からの習得過程を見るために、16名の学習者を分析対象とする。また、並列・継起の接続表現の使用実態を調査するために、出来事を時間軸に沿って述べるテーマを選び、1年次後半の「私の1日」、2年次前半の「私の休日」、2年次後半の「私の思い出の旅行」の計3回の作文データを分析する。分析対象は表2の通りである。

表2 分析対象

学習段階	実施時期	作文テーマ	字数
1年次後半	2016年1月	私の1日	200字程度
2年次前半	2016年10月	私の休日	600字程度
2年次後半	2017年5月	私の思い出の旅行	800字程度

### 3.2 分析の手順

分析の手順は次の通りである。

- ①それぞれの作文で使われている並列・継起の接続詞、接続助詞を、1年次後半、2年次前半、2年次後半という学習段階ごとに形態別に取り出し、数え上げる。
- ②①から、並列・継起の接続詞、接続助詞の形態別使用率を算出する。計算式は次の通りである。  
(当該接続詞の使用率) = (当該接続詞の使用数) / (並列・継起の接続詞の総数)

(当該接続助詞の使用率) = (当該接続助詞の使用数) / (並列・継起の接続助詞の総数)

- ③ 1 年次後半, 2 年次前半, 2 年次後半という学習段階ごとに, 並列・継起の接続詞, 接続助詞の使用率の変化を記述し, 変化の背景にある理由を考察する。

#### 4. 「そして」の使用実態

並列・継起の接続表現全体について分析する前に, 高頻度接続詞「そして」の使用実態について確認しておきたい。学習者における 1 年次後半, 2 年次前半, 2 年次後半の「そして」の使用数と使用率を分析した結果が次の表 3 である。

表 3 「そして」の使用実態

学習段階	そして			並列・継起の 接続詞の総数
	並列	継起	合計	
1 年次後半	0 (0.0%)	17 (47.2%)	17 (47.2%)	36
2 年次前半	4 (25.0%)	2 (12.5%)	6 (37.5%)	16
2 年次後半	4 (23.5%)	5 (29.4%)	9 (52.9%)	17

表 3 からわかるように, 最も使用率が高いのは 1 年次後半で, 並列・継起の接続詞の総数の 47.2% を占めており, 全て継起を表していることがわかった。2 年次前半では, 「そして」の使用率が 37.5% に下がり, 継起の使用率が 12.5% と下がる一方, 並列を表す用法が新たに出現していた。2 年次後半になると, 「そして」の使用率に上昇が見られ, 並列・継起の接続詞総数の 52.9% を占めている。

このように, 1 年次後半から 2 年次後半にかけて, 「そして」の使用率が下がってからまた上がる傾向があり, 並列の用法は 2 年次前半から見られるようになった。2 年次前半に使用率が低下する理由として考えられるのが, 「そのため」「そこで」などの似たような意味用法を持つ別の接続表現を学ぶことによって, 使える種類が増えたことである。しかし, 2 年次後半は前半より学習が進んでおり, 使える接続表現がより多くなると想定されるのに, なぜ 2 年次前半より「そして」の使用率が高くなったのだろうか。

その要因を探るために, 「そして」を含む並列・継起の接続表現の使用実態を調査し, 1 年次後半と比較して見られた 2 年次前半の変容, 2 年次前半と比較して見られた 2 年次後半の変容に分けて分析し, それぞれ 5 節と 6 節で述べることにしたい。

#### 5. 2 年次前半に見られた変容

1 年次後半と 2 年次前半の作文の並列・継起の接続表現を分析した結果, ①複文産出能力の向上による接続詞の使用率の低下, ②接続詞のバリエーションの増加, ③並列と継起の接続助詞の使い分け, の 3 点が観察された。

### 5.1 接続詞の使用率の低下

表3からわかるように、1年次後半より2年次前半の方が、接続詞の総数が少なくなり、「そして」の使用率も下がっている。「そして」を含む接続詞の使用実態を調べたところ、表4のように、1年次後半では継起の「そして」の使用率が最も高く、それ以外に「その後」「それから」も使用されている。2年次前半になると、並列の接続詞が使われるようになる一方で、継起を表す「そして」と「その後」の使用率が下がり、「それから」の使用が見られなくなって継起の接続詞の使用率が低下していることがわかる。

表4 1年次後半と2年次前半における並列・継起の接続詞の使用実態

学習段階	並列の接続詞						継起の接続詞			
	そして	それから	それに	また	さらに	合計	そして	それから	その後	合計
1年次後半	0	0	0	0	0	0	17	8	11	36
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	47.2	22.2	30.6	100.0
2年次前半	4	2	3	2	2	13	2	0	1	3
	25.0	12.5	18.8	12.5	12.5	81.3	12.5	0.0	6.3	18.8

各欄の上は使用数、下は使用率(%)

接続詞の総数が減ると同時に、継起の接続詞の使用率が低下する理由として考えられるのは、1年次後半では学習者の複文産出能力が足りないため、単文をつなぐ際に接続詞が使用されていたことである。この仮説を検証するために、1年次後半と2年次前半での単文と複文の割合を計算した結果、表5のように、1年次後半から2年次前半にかけて、単文の割合が43.2%から28.5%に下がる一方、複文の割合が56.8%から71.5%に上がり、1年次後半では単文の割合が高いことがわかる。この結果から、1年次後半では単文をつなぐために接続詞が多く使用されたと考えられる。

表5 1年次後半と2年次前半における単文と複文の割合

学習段階	単文	複文	総文数
1年次後半	98 (43.2%)	129 (56.8%)	227
2年次前半	91 (28.5%)	228 (71.5%)	319

また、継起の接続詞のかわりにどのような接続助詞が使われるのかを明らかにするために、1年次後半と2年次前半における接続助詞の使用実態を調べ、次頁の表6にまとめた。表6からわかるように、1年次後半では、継起を表すテ形が26例であるのに対し、2年次前半では53例と増えている。このことから、2年次前半になると、継起の接続詞のかわりにテ形が使用されることが予想される。

表6 1年次後半と2年次前半における並列・継起の接続助詞の使用実態

学習段階	並列の接続助詞					継起の接続助詞					
	て	たり	し	連用形	合計	て	てから	たあと	と	たら	合計
1年次後半	12	17	0	0	29	26	4	0	1	0	31
	20.0	28.3	0.0	0.0	48.3	43.3	6.7	0.0	1.7	0.0	51.7
2年次前半	22	23	4	2	51	53	2	2	6	9	72
	17.9	18.7	3.3	1.6	41.5	43.1	1.6	1.6	4.9	7.3	58.5

各欄の上は使用数，下は使用率（％）

例（1）は、同じ学習者によってそれぞれ1年次後半と2年次前半に書かれた作文の一部で、朝起きてからの出来事が述べられている。1年次後半の作文は主に単文をベースに記述され、「そして」が1例使用されている。一方、2年次前半の作文では「そして」の使用が見られなくなり、「～て」（以下、テ形）と「～たら」を用いて時間の継起を表している。1年次後半の作文でもテ形が出現しているが、2年次前半では複文の増加に伴い、1年次後半よりテ形の使用率が高くなっている。

継起を表すために1年次後半では接続詞を用いて単文をつなぐことが多いのに対して、2年次前半では複文産出能力の向上につれて、接続詞のかわりに接続助詞を使用できるようになる。中国語はSVO言語であり、易しい内容を時間軸に沿って並べていく場合、単文を「然后」（英語のandに相当するもの）でつないでいく。そのため、中国語をベースに考えると、SOV言語である日本語のテ形のように節末で文をつなぐ発想は浮かびにくい。したがって、日本語のテ形を習ってはいても、実際に頻用するようになるまでにタイムラグがあるということが背景にあると考えられる。

例（1）

CCB07\_1年次後半「私の1日」

僕は朝の6時に起きます。そして、朝ご飯を食べます。食事の後、少し本やノートなどを読んで、いつも教室へいきます。朝の8時に授業があります。

CCB07\_2年次前半「私の休日」

顔を洗い口を漱ぐことが終わったら、学校の隣の公園に行って、人通りがないところを探して、座って、好きな小説を読みます。

## 5.2 接続詞のバリエーションの増加

複文の増加によって継起の接続詞の使用率が低下したことに加え、接続詞のバリエーションが増えた様子も観察できた。表4のように、1年次後半では「そして」、「それから」、「その後」しか使用されていないのに対して、2年次前半では並列を表すために「それに」、「また」、「さらに」という3種の新たな接続詞が見られるようになった。また、2年次前半では「そして」、「それから」を用いて継起だけでなく、並列も表せるようになっている。



作文例を詳しく見ていった結果、学習歴が上がるにつれて、時間的に連続した出来事を表す継起の接続詞の使用が減少する一方、内容的に類似する出来事を表す並列の接続詞を用いて作文が書けるようになっていくことがわかる。例 (2) は (1) とは別の学習者が 1 年次後半と 2 年次前半に書いた作文で、1 年次後半では継起の「そして」が使用され、2 年次前半では並列の「さらに」が使用されている。2 年次前半の作文では「ダンスが好き」であることを、「ボールゲームに興味がある」ことと、並列の接続詞「さらに」を用いてつないでいる。時間的な流れに沿って出来事を継起的に述べるのではなく、類似の性質を帯びる事柄を並列的に述べられるようになる。

#### 例 (2)

##### CCB14\_1 年次後半「私の 1 日」

私は毎日朝の 6 時に起きます。顔を洗って、7 時に朝ごはんを食べます。そして、授業の教室に行きます。午前の授業は 8 時から 11 時 40 分までです。授業のあと、いつも友達と一緒に食堂でお昼を食べます。

##### CCB14\_2 年次前半「私の休日」

ジャズダンスが一番好きで、常に学校のストリートダンスサークルと一緒にダンスをします。自分の能力はまた高めることが必要で、プロのダンススタジオでダンス授業を受けて行きます。さらに、ボールゲームに興味があって、時々テニスとバドミントンを楽しんで行きます。

このように、学習が進むと、複文の産出ができるようになると同時に、使える接続詞のバリエーションが増えることによって、「そして」の使用率が下がっている。では、作文における複文の割合が高くなるにつれて、接続助詞の使用実態にどのような変化が見られるのだろうか。それを明らかにするために、1 年次後半と 2 年次前半の並列・継起の接続助詞の使用実態を調べた。

### 5.3 並列と継起の接続助詞の使い分け

表 6 のように、2 年次前半では並列を表すテ形以外に、並列を専ら表す「～し」の使用が新たに見られた。継起を表すテ形の使用率がやや下がる一方、「～と」の使用率の増加と、継起を専ら表す「～たあと」、「～たら」の使用が見られた。このように、接続助詞のテ形の並列用法と継起用法の使い分けができるようになると同時に、並列と継起をそれぞれ表す接続助詞のバリエーションが増え、並列と継起の意味的な区別が、異なる形態の使い分けを通してできるようになる。

例 (3) は 1 年次後半と 2 年次前半に同じ学習者が書いた作文である。継起を表すのに 1 年次後半ではテ形が使用されるのに対し、2 年次前半では「～たら」が使用されている。2 年次前半になると、テ形のかわりに、継起を専ら表す「～たら」の使用が定着したことがわかる。



例 (3)

CCB12\_1 年次後半「私の 1 日」

わたしは七時に起きます。それから、顔を洗って、歯を磨きます。七時半に食堂で朝ご飯を食べます。食事の後、大学の講義は始めます。

CCB12\_2 年次前半「私の休日」

アイドルの新垣結衣はわたしに好かれるタイプのため、彼女の出演したドラマを見ているのは私の趣味ようです。例えば、週末にシャワーを浴びたら、パソコンで魅力にあふれている彼女のドラマを見るのが十分満足だということができます。

## 6. 2 年次後半に見られた変容

4 節で述べたように、2 年次前半から後半にかけて、「そして」の使用率に上昇が見られ、2 年次後半では並列・継起の接続詞総数の半数以上を占めている。学習が進めば使える接続表現の種類は増え、それに伴って「そして」の使用率がさらに下がることが予想されるが、その予想に反してなぜ使用率に上昇が見られたのか。その点を明らかにするために、並列・継起の接続詞と接続助詞の使用実態を仔細に分析していく。

### 6.1 接続詞の使用位置の変化

表 7 に示すように、2 年次後半になると、新たな接続詞の使用は見られず、各接続詞の使用率に大きな変化もない。しかし、並列の接続詞の総使用率が 81.3% から 58.8% に下がる一方、継起の接続詞の総使用率が 18.7% から 41.2% に上がり、継起を表す「そして」と「その後」の使用率の増加が見られた。2 年次前半では継起の接続詞の使用率が一旦下がるのに、2 年次後半ではなぜ再び使用率が高まるのだろうか。継起の接続詞が使用される文脈を分析し、2 年次前半との相違点を考察した。その結果、学習者が 2 年次後半では段落をつなぐために「そして」と「その後」を使用し、段落の冒頭に並列・継起の接続詞を使用する例が見られた。

表 7 2 年次前半と 2 年次後半における並列・継起の接続詞の使用実態

学習段階	並列の接続詞						継起の接続詞			
	そして	それから	それに	また	さらに	合計	そして	それから	その後	合計
2 年次前半	4	2	3	2	2	13	2	0	1	3
	25.0	12.5	18.8	12.5	12.5	81.3	12.5	0.0	6.2	18.7
2 年次後半	4	2	2	2	0	10	5	0	2	7
	23.5	11.8	11.8	11.8	0.0	58.8	29.4	0.0	11.8	41.2

各欄の上は使用数、下は使用率 (%)

例 (4) は継起の「そして」が使用される作文例で、旅行の出来事が書かれている。段落ごとに意味のまとまりを作り、それぞれの段落で異なる旅行先での出来事を述べ、段落の冒頭に「そして」を使用している様子が観察された。ここでの「そして」の使用は誤用とは言えないが、や

や違和感がある。そのため、それを代用できる「次に」などの接続詞も学習者に合わせて教える必要があろう。しかし、「そして」などを使って段落をつなげられるようになっている点が重要である。このように、段落の冒頭で接続詞が適切に使用できるよう、使用位置を考慮した接続詞の使い分けを指導し、作文の全体構造を明確に意識させることが、出来事の展開をわかりやすく示す上で効果的であると思われる。

#### 例 (4)

##### CCB01\_2 年次後半「私の旅行の思い出」

最初に着いたところは新潟でした。私の出身地—中国の東北地方と同じ、高品質のお米の生産地としてとても有名でした。夏の新潟は緑色に囲まれていました。青空と緑色の大地、飾りのない自然景色はまるで油絵のように芸術感に富んでいました。それと、新潟のマスコットキャラクター、朱鷺もすごく可愛かったです。

そして、私たちは京都に行きました。京都は古都で、建築物と都市の全体の雰囲気が人に時代のついた感じを与えてくれました。街のあっちこっちで見える着物を着く女の子達はとても綺麗でした。ちなみに、私たちは京都である乳牛のような柄と色を持つハトを見ました。面白かったから、写真を撮りました。

## 6.2 連用形の使用率の上昇

2 年次前半と 2 年次後半における並列・継起の接続助詞の使用実態は表 8 の通りである。

表 8 2 年次前半と 2 年次後半における並列・継起の接続助詞の使用実態

学習段階	並列の接続助詞					継起の接続助詞						
	て	たり	し	連用形	合計	て	てから	たあと	と	たら	連用形	合計
2 年次前半	22	23	4	2	51	53	2	2	6	9	0	72
	17.9	18.7	3.3	1.6	41.5	43.1	1.6	1.6	4.9	7.3	0.0	58.5
2 年次後半	30	29	2	11	72	31	2	5	5	6	13	62
	22.4	21.6	1.5	8.2	53.7	23.1	1.5	3.7	3.7	4.5	9.7	46.2

各欄の上は使用数、下は使用率 (%)

表 8 からわかるように、並列を表す連用形の使用率が 2 年次前半の 1.6% から 2 年次後半には 8.2% に上がっている。継起を表す連用形は 2 年次前半には見られないが、2 年次後半では使用率が 9.7% となっている。2 年次後半の作文例を分析して観察できたのが、継起を表す際に、テ形のかわりに動詞連用形の中止法が使用される現象である。それが継起のテ形の使用率の低下につながったと考えられる。

例 (5) は 2 年次前半と後半に同じ学習者が書いたもので、2 年次前半の作文では時間の継起関係を表すのにテ形が 2 回使用され、2 年次後半では継起のテ形が見られず、そのかわりに連用形が使用されている。動詞連用形の中止法の使用によって、作文がより書き言葉らしい文体になっている様子が窺える。

## 例 (5)

## CCB02\_2 年次前半「私の休日」

土日は、ずっと寝室にいるのが多い。朝寝坊して、顔を洗い歯を磨いて、昼ご飯を買いに食堂に行く。

## CCB02\_2 年次後半「私の旅行の思い出」

最後、わたしは一人で清西陵の泰陵に戻った。泰陵の高くて真っ赤のお城を通し、細くて長い小道があった。この森の中にある道を通り抜け、1 キロ歩き、お寺が見えた。

## 7. 結論と考察

**結論①** 1 年次後半から 2 年次前半にかけて、並列・継起の接続詞の使用率の低下と、接続助詞の使用率の上昇が見られる。同時に並列と継起の状態上の区別が可能となる。

1 年次後半の作文は単文を羅列し、接続詞でつなぐものが多い。分析の結果、複文の産出能力が足りないことが一因として考えられる。また、作文例を考察すると、文数に対する接続詞の割合が高い作文も少なくない。接続詞の割合が 50% に上る作文も見られた。石黒ほか(2009)はジャンル別の文章における接続詞の文数に対する割合を調べ、一般的な小説や新聞記事は 10% 前後であり、論理的な文章である論文でも 25% 前後であると述べている。このことから、学習者は 1 年次後半に並列・継起の接続詞を過剰に使用していると判断される。

2 年次前半になると、接続詞の使用率が下がり、そのかわりに接続助詞が使用される様子が観察された。接続詞の適切な使用という観点から言えば、学習者の過剰使用が薄れたため、接続詞の習得が進んだと言える。つまり、接続詞の習得状況をはかる際に、使用率の増加だけを基準とするのではなく、過剰使用の有無という観点から判断する必要もある。

また、1 年次後半では限られた接続表現しか使えないのに対して、2 年次前半ではバリエーションの増加が見られ、並列を表す接続詞「また」や接続助詞「～し」、継起を表す「～たあと」「～たら」などが使えるようになる。新たな接続表現の種類が使えるだけでなく、2 年次前半では、同じ接続表現の異なる用法が習得される様子も見られた。1 年次後半では「そして」と「それから」を用いて継起だけを表しているが、2 年次前半では並列も表せるようになる。

このように、同じ接続表現の用法別の使い分けができることや、並列と継起を専ら表す接続表現のバリエーションの増加から、2 年次前半では学習者が並列と継起の形態上の区別ができるようになり、意味・用法の観点から緻密な使い分けができるようになることがわかる。

**結論②** 2 年次前半から 2 年次後半にかけては、並列・継起の接続表現にバリエーションの増加は見られないが、段落の冒頭で接続詞を使えるようになり、動詞連用形中止法の使用率の上昇が見られた。

結論①で述べたように、1 年次後半から 2 年次前半にかけて、並列・継起の接続表現のバリエー

ションの増加が見られ、意味・用法の観点からの使い分けができるようになる。一方、2年次前半から2年次後半にかけては、バリエーションは変化しないものの、接続詞が段落の冒頭に使用される様子が観察された。2年次前半では文と文をつなぐために接続詞が使用されるのに対し、2年次後半では段落と段落をつなぐための使用が見られた。段落の冒頭に接続詞を使うことによって、段落と段落の接続関係を明確に示すことができる。ただし、段落の冒頭に接続詞を使うべきなのか、それが作文のわかりやすさ、評価にどのように影響するのかについては、さらなる検証が必要である。さらに2年次後半では、テ形の使用率が下がり、そのかわりに動詞連用形の中止法の使用が見られ、学習者がより作文の文体に目を向け、書き言葉らしい文体で書けるようになっていくことがわかった。

## 8. 日本語教育への応用と今後の課題

以上のように、1年次後半から2年次前半にかけて、学習者が並列・継起の接続表現を意味・用法の観点で使い分けができるようになり、2年次後半では、接続表現の誤用率が下がり、文体や文章構造の観点から接続表現を選択できるようになった。これはあくまでも全体的な傾向であり、個々の学習者によって習得状況が異なる。しかし、この習得過程をひとつの目安として学習者の作文指導に役立てられる可能性があると考えられる。

たとえば、1年次後半終了の段階では、単文を「そして」でつないでいく中国語的な発想から脱却し、節をテ形でつなぐ発想を定着させる。また、テ形を時には並列の「～たり」「～し」、時には継起の「～と」「～たら」に言い換えさせ、並列と継起の用法の違いを意識させる。一方、2年次終了までの段階では、意味・用法の違い以外にも、作文の文体や文章構造を考えさせ、書き言葉的な文体の接続表現を選択させたり、段落の冒頭での接続詞の使用を意識させたりする工夫が必要である。特に後者について、俵山（2017）が接続詞を「文章中の構造パーツとして提示する」ことを提案し、文章構造の中で接続詞を考えさせる必要があると主張しているように、「どんな接続詞を使うか」という接続詞の種類の選択だけでなく、「どこで接続詞を使うか」という接続詞の出現位置の選択や段落構成を考えさせながら指導すると効果的であろう。このように、教師は学習者の学習段階に応じて、作文における接続詞教育の目標設定や指導方法などを考え、適切な時期に適切な使用法の習得を促すように工夫する必要があると思われる。

今後は、このような接続表現の習得過程がほかの接続類型にも適用されるのかについて、さらなる調査をして明らかにする必要がある。また、中国語を母語とする学習者に限らず、母語の異なる学習者や、さらに日本語母語話者のデータを集め、分析を継続していきたい。

## 参考文献

- 浅井美恵子（2003）「論說的文章における接続詞について ― 日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較 ―」『言葉と文化』4: 87-97.  
 石黒圭（2000）「『そして』を初級で導入すべきか」『言語文化』37: 27-38.  
 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続詞のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12: 73-85.

- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 東京：教育出版。
- 砂川有里子 (2015) 「逆接の接続詞と談話構成力の習得 — 日本語学習者の縦断的な作文コーパスを活用して — 」 阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』 第 15 章. 285-317. 東京：くろしお出版。
- 俵山雄司 (2017) 「流れがスムーズになる接続詞の使い方」 石黒圭 (編) 『わかりやすく書ける作文シラバス』 第 8 章. 141-157. 東京：くろしお出版。
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐる」 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』 87-126. 東京：くろしお出版。
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』 東京：くろしお出版。
- 峯布由紀 (2007) 「認知的な側面からみた第二言語の発達過程について — 学習者の使用する接続辞表現の分析結果をもとに — 」 『日本語教育』 134: 90-99.

## The Use of Parallel and Sequential Conjunctions in JFL Learners' Writing: An Analysis of the Longitudinal Corpus of Chinese Native Speakers

DONG Yun

Graduate Student, Hitotsubashi University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

This study aims to reveal the acquisition process of parallel and sequential conjunctions in the longitudinal writing corpus of Chinese JFL learners. By analyzing three writing data sets from the second half of the first year, the first half of the second year, and the second half of the second year, the following conclusions were reached. (1) In the second half of the first year, the conjunctive adverb *soshite* is overused, though the conjunctive particle *te* is generally used. (2) In the first half of the second year, because the use of *te* form is stabilized, the usage rate of conjunctive adverbs descends, and the usage rate of conjunctive particles increases. Simultaneously, the proper distinction between parallel and sequential conjunctions is observed. (3) In the second half of the second year, the conjunctive variations do not change, but the suspended forms are used as the written style of the *te* form; moreover, the conjunctive adverbs are used at the beginning of the paragraph from the point of view of global cohesion.

**Key words:** learners' corpus, second language acquisition, writing education, conjunctive adverbs, conjunctive particles